

1. 平成 26 年度シンポジウム・情報交換会 講演内容

公益社団法人スポーツ健康産業団体連合会

第 13 回シンポジウム

開催日：平成 26 年 9 月 3 日（水）14:30～17:00

場 所：スタジアムプレイス青山 9F ビジョンホール

レガシーの創造

～ 2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて～

I. 基調講演 間野 義之 氏（早稲田大学スポーツ科学学術院 教授）

演題：2020 年東京オリンピック・パラリンピック・レガシー

II. トークセッション

（掲載略）

テーマ：「レガシーの創造」2020 年東京オリンピック・パラリンピックの
開催に向けて ～目指すべき方向

コーディネーター

野川 春夫 氏（独立行政法人日本スポーツ振興センター 監事）

パネリスト

間野 義之 氏（前出）

大日方邦子 氏（株式会社電通パブリックリレーションズ）

杉浦 久弘 氏（一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会
準備運営局長）

I. 基調講演

演題：2020 年東京オリンピック・パラリンピック・レガシー

講師：間野 義之 氏（早稲田大学スポーツ科学学術院 教授）

間野 ご紹介いただきました早稲田大学の間野でございます。

今日は、オリンピック・パラリンピックのレガシーについて、皆様に情報提供を差し上げたいと思います。

もう 1 年前になりますが、昨年の 9 月 7 日、

日本時間 9 月 8 日の未明、東京に決定したことを、ここにいらっしゃる方は本当に歓迎されたことだと思います。

1992 年のバルセロナから 2012 年のロンドン大会まで、「オリンピック招致における経験的分析」という論文があり、これを見ると、候補都市の中から、決定開催都市は、マイナス距離、プラス気温、プラス宿泊。どういうことかということ、選手村から競技会場までの平均距離が短くて、開催期間中の平均気温が高くて、そしてホテルの数が多いところが立候補都市の中では選ばれている研究がありま

した。

これを3都市で比較して、マドリッド、イスタンブール、東京で見ると、距離は、東京は8km圏内で、コンパクトと言っているが、マドリッドのほうが実は、はるかにコンパクトであり、気温も、東京の夏はひどい。「本当に、2020年、大丈夫か」と今も危ぶまれています。マドリッドは最高気温は東京よりも高い。経験則からいうと、そのほうが実際には招致に成功しています。現実的には、湿度が低いから、たぶん向こうのほうが気温が高くて快適です。東京が勝っているのはホテルの数だけです。そういった意味で、この3都市の中で、世論ではイスタンブール対東京、イスタンブールが一番の強敵でイスラム圏初開催、東洋と西洋の架け橋と言われましたが、実はマドリッドが本命ということが過去の経験からは言われていました。

実際、2012年のIOCのワーキンググループが評価をした1次を見ますと、例えば、マドリッドの会場配置コンセプト・競技会場は最高9点、最低8点、イスタンブールは8点と6点、東京は9点が付いたのですが、最低点は7点が付いています。一番点数が高かったところ、両方を足した数字が一番高いところを黄色で抜いてみますと、やはりマドリッドと東京は互角です。イスタンブールは、法的側面、通関・入国管理は3都市とも一緒ですが、政府・市民の支持は1番でしたが、それ以外は、やはりマドリッドか東京かという非常に厳しい争いになっておりました。

私は、ちょうど9月7日の深夜から日本テレビの「Going!」という番組に出て、クリームシチューの上田さんと一緒にブエノスアイレスのIOC総会の解説をやっていました。上田さんに「間野先生、東京は何%で勝ちますか」と言われると、「50%です」といって、最後まで「50%です。50%です」と言い続けて、最後の最後のほうになって「70%くらいでしょうか」と。どっちでもいいのだから、

90%とか100%とか言っておけばいいのですが、ちょっと根が真面目なもので、正直者でなかなか大きな数字が言えなかったのです。データを見ると本当に互角でした。

こんなに厳しいところでしたが、第1回投票が終わった瞬間に、ブエノスアイレスの放送で「続いて、マドリッドとイスタンブールの投票をやります」と流れて、最初は、みんなパニックになりました。「1回目で東京は落選か」みたいに。これは、そうではなくて、票が26票ずつで一緒だったので、どちらを残すかという投票でありました。個人的には、イスタンブールが残ってくれたら、これはたぶん強いなど。これでマドリッドが残ると、ますます本当に強敵だなというふうに思っていました。幸いイスタンブールのほうが勝ち残り、最後は36対60という圧勝でした。

これは1次評価とか過去の経験則から見ても当然なのですが、それ以外の要因で私が分析したところは、2014年・ソチも、もう何とかギリギリ間に合ったという感じです。16年のリオデジャネイロ、14年のワールドカップを見ても、ギリギリで、本当にオリンピックできるのかと。18年・平昌(ビョンチャン)、韓国ですが、競技場と交通網の整備、これは全然遅れています。発展途上国でオリンピックをやることはいいのですが、一回失敗すると、また8年くらい空きます。2020年は、たぶんIOCは絶対に成功させたい。イスタンブールと東京だったら、どちらのほうが確実性が高いかという、たぶんお金の面でもインフラの面でも東京。そういった意味で相当、東京が有利になったことは間違いありません。

おまけに、2024年は去年の11月14日が立候補申請締め切りで、9月の段階では決まっていませんでしたが、噂に出ていたのは2つしかなくて、アルマトイというカザフスタンの旧首都、あるいはパッハ会長のお膝元のミュンヘンがありました。結果として

ミュンヘンは住民投票によって立候補を断念しました。つまり、発展途上国がずっと続く中で、2020年とか、どこかで一回くらいきちっとやらないと、オリンピック全体の価値が減衰するのではないかという危機感が、IOC委員にあったということもあると思います。招致委員会が立派な立候補ファイルを作って、すばらしいプレゼンテーションをしたということもあったと思います。

偶然、私は、9月10日からイスタンブールに初めて出張しました。現地は、とてもきれいな街で、人口がほぼ東京と一緒です。人口密度も一緒ですから、だいたい面積も一緒です。とてもいいのですが、ど真ん中に海峡がある。ボスポラス海峡。橋が2本しかないのです。想像してみてください。東京のど真ん中に幅3kmの川が流れて、橋が2本しかなかったら、どんな混乱をするか。ですから、また次の2024年もイスタンブールは立候補を表明しましたが、残念ながら、たぶんこの地形・地理ではオリンピック開催はかなり難しいのではないのでしょうか。ようやく3本目の地下トンネルが通ったところではあるのですが、交通渋滞と選手や観客の安全な輸送ということを考えると、かなり厳しいなということを行って痛感しました。

オリンピック・レガシーを、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。オリンピック憲章の「IOCの使命と役割」の中で、IOCは「オリンピック競技大会のよい遺産（レガシー）を、開催都市ならびに開催国に残すことを推進する」とあります。レガシーという言葉は、1956年のメルボルン大会招致の際に既に使われ始めていました。しかし、憲章に載るほど重きはありませんでした。契機は、2002年のソルトレークオリンピックの時に、IOC委員が買収されるという大事件、大スキャンダルが起き、ソルトレークシティは、どうしても開催しなかった。長野と競り合って、4票差でギリギリで落選しました。次こそ確実

に勝ちたいということが先走って、つい買収をしてしまったのです。買収されたIOC委員は追放されました。

これは何が問題かという、別に刑法上はまったく問題ありません。IOCの委員は個人で、公務員ではありませんから、贈収賄は成立しません。そこが問題ではないのです。オリンピックは、なぜ、あれだけ人々が興奮して、テレビを見て、スポンサーが付くのかというと、オリンピックのIntegrityというのがキーワードです。高潔性です。オリンピックは、高くて、潔くて、すばらしくて、美しいものなのです。このイメージでスポンサーが付くわけです。選手には、だから、例えばドーピングはするな、八百長をするな、違反するな、フェアプレーをしろと。商業的にはそういう見方ができます。一方で、ピッチの外でIOCがそんな汚いことをやっていたら、これもオリンピックブランド、オリンピックイメージに傷がつくわけです。つまり、世界の中でオリンピックやスポーツが大切だと多くの人が思っているけれど、そのイメージダウンにつながるのです。そのことからピッチ外でも、IOCに関しても、もっときっちり厳罰に処罰していこうと考えられるようになりました。

そして、ソルトレークシティでのオリンピックが2月にあって、9カ月後のIOC総会では、オリンピック憲章にレガシーを追加しよう。IOC委員を厳しく取り締まるというよりも、オリンピックをやったあとに何を残すのか。これがないと、おそらくメガスポートイベントとしてオリンピックをやり続けるだけでは、オリンピックは将来なくなるとIOC委員たちは危機感を持ったのです。オリンピックを将来にわたって続けるためには、終わったあと、その開催都市や開催した国に何かよきことが残っていかないと立候補するという都市の手が上がらなくなるし、あるいは「そんなものは無駄だ」「税金の無駄遣いだ」

という人たちがたくさん出てきて、やがてオリンピックは消えてなくなるでしょう。

1896年に第1回オリンピックがアテネで始まり、30回やったが古代オリンピックは、BC776からAD361年くらいまで1000年以上続いています。その間いろんなことがありましたが、常にいろんなことを変えながらレガシーを残してきました。もう一度、古代オリンピックのものを近代オリンピックに残そうという考え方が入ってきたのです。

2012年大会からは招致段階にも考慮すべき重要なテーマで、必ず立候補ファイルに書きなさい、2012年大会は、2005年、7年前に決まります。2002年に総会で定めて、その時はもう2008年の北京オリンピックは間に合いませんから、次の2012年、一番早い夏のオリンピックからはレガシーを全部立候補ファイルに盛り込ませることを義務化しました。

この言葉は英語ですが、訳せば、遺産とか先人の遺物と訳します。語源はラテン語のレガタスで、ローマ教皇の特使という意味になります。どういうことかという、キリスト教を普及するためにローマ教皇が特使を派遣します。そこでキリスト教を布教した際に、ローマの技術や文化や知識も伝授して、布教活動を終えて特使が去ったあとキリスト教とともに文化的な生活が残ります。極めて西洋人的な、キリスト教的な発想ですが、オリンピックが終わったあとに、本当にやってよかったといったものをたくさん残していく、こういうオリンピックにしないと、もうこれからは続かないのではないのでしょうか。今どんどん肥大化、商業化が進んでいく中で、この先のオリンピック、やればやるだけ損をする、やればやるだけマイナスである、とまらないプラスのレガシーを残す、ポジティブなレガシーを残すオリンピックにしていくべきです。

私たちは東京が勝ったのをものすごく感激して見ていたわけでありませうけれど、実は、こんなに招致合戦というほど大騒ぎされたのは最近のことです。IOCの中には忌まわしい

4つのMというのがあり、それは何かというと、メキシコ、ミュンヘン、モントリオール、モスクワの頭文字のMです。

メキシコオリンピック、ここでアメリカ人の陸上競技選手がメダルを取りました。その人が黒人でした。アメリカではまだまだ、あるいは世界中でまだまだ人種差別があるということのアピールするために、表彰台で黒の革手袋をはめて、これはブラックパワーの象徴です。つまり、オリンピックには政治活動を持ち込んではいけないのに、それを表彰台でやったのです。その2人の選手は追放されました。メキシコでも学生運動が広まり、そういう問題が起きました。

次のミュンヘンオリンピックでは、ミュンヘンはナチスドイツ、ヒトラーのお膝元だったわけですが、ドイツは敗戦国であり、様々な問題を起こした中で、新しいドイツが再生していく、そのためのオリンピックとしてドイツを見直してもらおうと思って始めたわけですが、選手村でテロ行為がありまして、イスラエルの選手が全員死亡するという悲惨な事件が起きました。ドイツは本当にそこで威信を回復したいと思ったのに、そうではなくて、ドイツはきちっと警備もできない、人質も助けることができない国で、また血塗られたというイメージがその時はついてしまったりして、一所懸命やったのですが、ネガティブなレガシーが残ってしまいました。

そしてモントリオール、カナダのモントリオールですが、この頃はまだ、オリンピックを開催するときには、税金を使っていました。1984年のロサンゼルスオリンピック以降が商業的なオリンピックになっていきました。スポンサーを集めようということで、小口でたくさん集めようと思いました。大口で少しだけ集めると、そこが「やっぱりやめた」とか倒産したとなるとお金がなくなるから、安全・安心、確実にやるためには、しかもそのムーブメントを広げるためには、なるべく多くの

人たちに少しずつ出してもらおうということをやりました。これが大失敗して、約1,000億円の赤字を出しました。30年たって、ようやく税金で穴埋めできました。オリンピックをやると都市財政が脆弱化するということがその時には言われました。

80年、まだ東西冷戦であり、ソ連が、東側諸国のほうが文明的にも優れていて、スポーツ的にも優れているのだ、これを証明しようという、ある意味で社会主義の絶頂の頃でした。ソ連が莫大な予算をつぎ込んで、これまでのオリンピックには例をみないくらいのお金をつぎ込んで、選手村から競技会場から、すべて造りました。それを西側諸国に見せて、東側諸国の威信を高めようとやったのですが、アフガニスタンにソ連が侵攻したことによって西側諸国の多くがボイコットして、結局、世界にソ連の様々なインフラストラクチャー、技術をお披露目することはできませんでした。

こんな4つのMとって、オリンピックをやれば必ず成功するわけではないし、むしろネガティブだということも、古いIOC委員の人たちは、みんな知っています。それを繰り返さない。今もどんどんどん「オリンピックをやりたい」と出てきているのは、古くを知っているIOC委員からすると夢のような状態です。彼らは2002年に、また同じことを繰り返してはいけないということで、もっとオリンピックがきちっとしたポジティブなレガシーを残すようにしない限り、これは永続できないと思ったわけです。

ちなみに、1984年のロサンゼルスオリンピックは大成功というふうに、我々は西側諸国から、思われていますが、必ずしもそうではありません。東側諸国が報復にボイコットしています。それと同時に、84年大会は、ミュンヘン、モントリオールをみんな見てきた都市は、ある意味で萎縮をして、どこも手を上げないで、ロサンゼルスしか手を上げなかった。

そんな中でピーター・ユベロスという実業家が来て大成功させて、オリンピックは損をしたり、きちっとセキュリティをやればテロも防げるしということも多く都市が手を上げるようになってきたというのが実情です。

オリンピック・レガシー、これは「レガシーキューブ」という論文に書いてある、ひとつの概念ですが、ポジティブとネガティブと両方があります。形があるものとないもの、ハードとソフトと言ってもいいかもしれません。そして、計画的と偶発的なものがあります。ともすると、レガシーというと、過去のいろいろな研究や申請書類を見ると、みんなポジティブで、形があって、計画的なものだけを「レガシー、レガシー」というふうに、オリンピックの贈り物とか言ったりする場合に、ハードで、ポジティブで、計画的なものだけなのですが、実はネガティブなものもあるし、無形でネガティブで偶発的に起きるテロのようなこともあります。この8つをバランスよく考えなければいけません。加えて、このレガシーキューブは時間とともに大きさが変わるし、場所によっても形や大きさが変わります。もう少し多様に、多面的な視点を持つ必要があるということが研究の中で指摘されています。

実際、タンジブル、インタンジブルと言っていますが、国民として一体感が醸成して、よい心持ちになったとか、障害者への気づきが高まるとか、そんなことが、これまで大会開催に伴って国民の中に残ったというのがある一方で、混雑したとか、窃盗があったとか、工事期間中は結局使えないとか、渋滞があったとか、そんなインタンジブルでネガティブなものも含まれています。

それでは、オリンピック・レガシーの具体例ですが、2012年の研究で、立候補ファイルと最終報告書を見てみますと、本当に多面的です。文化、経済、環境、イメージ、情報、教育、ノスタルジー、オリンピックムーブメ

ント、政治心理、社会問題、スポーツ、持続可能性、都市化、ある意味で何でもレガシーといえど何でもレガシーです。逆にいうと、スポーツにしかレガシーが残らないわけではなくて、スポーツ以外の分野にも様々なものを残すことができます。しかも有形・無形、両方、様々なものがあります。

ロンドンオリンピックは、ここから立候補ファイルで明記しなければならなくなったのですが、スポーツ、コミュニティ、環境を挙げました。スポーツは施設、若者育成、人口拡大、トップアスリート育成。コミュニティは、ロンドン東部地域中心部再生。そして環境、土壌汚染浄化、オリンピックパーク内の再生エネルギー利用、廃棄物の最小化、生物多様性保全、失業率の高い地域での教育、経済波及などなど、こういったものを2012年大会を通じて残すと言いました。我々からすると、ロンドン東部の開発は非常に小さなことのような気がするのですが、ロンドン市民あるいはイギリスにとっては、産業革命以降ずっと取り残された地域で、ここを何とかしなきゃいけないという、ある意味悲願だったのです。世界として東部が開発されて世界中の人々の幸せに近づいたかという、決してそうではないのですが、少なくともイギリス国民にとっては、どうしても手をつけたいところに手をつけられたことは、彼らにとってはとても大事な価値だったわけです。

レガシープランを、2012年大会からきちっと作っています。まずイギリスの政府、文化・メディア・スポーツ省の中で5つの約束をオリンピックの5年前に作っています。1つ目は、イギリスを世界トップのスポーツ国家にする。2つ目が、イーストロンドンの再開発。3つ目が、若い世代の啓発。4つ目が、持続可能なオリンピックパークの設計。5つ目が、イギリスが創造的、協調的、またビジネスチャンスに満ちていて、世界にアピールと言っています。ビジネスチャンス、やはり経済、こ

れをオリンピックを通じて世界の中にどういうネットワークを作っていくのかをきちっと計画化しています。

グレーター・ロンドン・オーソリティは、ロンドン市。大ロンドン市なんて日本語に訳したりしますが、ここでも5つのレガシーコミットメント。つまりこれは政府、文部科学省で、こちらは東京都という位置づけです。ロンドンの人々がもっとスポーツに関わる機会を増やす。ロンドンの人々に新たなビジネス、ボランティア活動のチャンスを与える。イーストロンドンの再構築。持続可能なオリンピックゲームとコミュニティの実現。ロンドンを多様性と創造性がある都市でアピールする。

そして、組織委員会や会場建設委員会をロンドンで作ったが、そこではレガシー・マスタープラン・フレームワークで、ハイクオリティな都市を実現する低価格住宅、これは選手村です。犯罪率を下げる、スポーツへの参加などなど、それぞれが2012年が終わったあとに何を残すのかということを考えています。

そして、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでもしばしば問題になりますが、東京一人勝ちじゃないかと。ではなくて、ロンドンの場合、スコットランド自身もレガシープランを作っていますし、ウェールズもレガシープランを作っていますし、北アイルランドもレガシープランを作っています。ここから言えるのは、2020年もそれぞれ、例えば各県でもいいですし、ブロックでもいいから、それぞれオリンピックにどう関わって、終わったあとに何を残していこうかということをやったりポジティブに考えて、そしてネガティブなレガシーを最小化するようなプランを考えていく必要があります。開催の5年前という来年になります。2015年。ですから、来年くらいにそれぞれの自治体が予算要求をして、オリンピックとどう関わって、どんなレガシーを残していくのか、そんな計画を、来年、作ったらいいのではないかとということ

を事あるごとに提案しています。

スポーツ健康産業で関係がありそうなところ。スポーツ・イングランドという日本体育協会のような組織があるのですが、そこが、イングランドの5～16歳は週5時間、16～19歳は週3時間、運動をするようにする。2012年までに最低200万人の新たな人たちがアクティブになれるようにサポートするなどなど。いずれのレガシープランを見ても、一番最初にスポーツが出てきます。そういった意味でいいますと、今日ここにいらしているスポーツ健康産業に携わる方々がどういうレガシーを自分たちの産業で作る、残していくのかを積極的に考えていく必要があります。ともすると、オリンピックをやると自動的に何かうまみがあるのではないかと思いがちですが、そうではなくて、やはり自分たちで働きかけて作って初めて、よきことが残るということをイギリスでは実際にやっております。

どんな事業をやっているかというところ、グラスルーツスポーツの活性化というのを一番最初に言っています。“Places People Play”という事業名を付けて、やはりもっとスポーツをする人を増やそうよ。ただの世界的なイベントではなくて、スポーツのイベントですから。地域スポーツの活性化に投資するとか、12の新たなマルチスポーツ施設を建設するとか、2万2千人のボランティアをリクルートするとか、クラブリーダープログラムで指導者を育成するとか、こういったことをやっています。

私たちは、今、研究室でオリンピックとスポーツ実施率の関係を調べていますが、ただオリンピックを開催しただけでスポーツ実施率が上がったという国はありません。なんとなく素人考えだと、オリンピックで盛り上がって、そうしたら自分もスポーツを始めるのではないのかなと思いがちですが、そんな簡単に人の行動というのは変わりません。何かを

考えるきっかけにはなるかもしれないけれど、行動を変容させるのはとても難しいのです。ですから、イギリスでもスポーツ実施率が少し上がっているのですが、それはこういうグラスルーツスポーツをエリートスポーツ政策と並行してやっているから、それでそういう関係ができています。オリンピックさえやればバラ色ということではありません。オリンピックをうまく活用しながら、様々なスポーツ健康産業界で抱えている課題を同時にどう解決していくのか。一番大事なのは、マーケットと言われるスポーツをする人・観る人・支える人、これをどれだけ増やすかということです。

東京都は、2020年までにスポーツ実施率、週に1回ですが、70%、これを宣言しています。70%って、とんでもない数字です。例えば、オリンピック招致の時に賛成した市民の支持率と一緒に30%の人は、オリンピック反対か、来なくてもいいと思っていました。ほぼオリンピックを支持した人、全員にスポーツをさせるという目標値を掲げています。

これは、実際にIOCが測って、スポーツで何が残ったのかというものです。スポーツのところを見てもみますと、1万2千のUKスクールスポーツに参加した学校がスポーツとボランティアの促進を働きかけているとか、政府は1,730億円を5年間にわたりニュースポーツに投資し、6千の新しい地域スポーツクラブを設立させるとか、“Places People Play”は35億円を37の地域クラブに投資してきたとか、そんなことが残っていることで、グラスルーツスポーツ政策も並行してやっています。メダルを取るということだけではなくて。それで初めて、人々の行動がようやく変わり始めるのです。

一方で、ロンドンオリンピックに対する市民から見たイメージは、ポジティブなものもありますが、金がなくなったり、治安が悪化

したり、交通が混乱したとか、自然環境に悪影響、無駄遣いだとか、いろいろネガティブなこともあります。必ずしもポジティブなことだけではありません。これは終わったあとのアンケート調査の結果です。

同じように他の都市を見ても、アトランタでは、街の中心部がきれいになったとか、通信環境、インターネットがちょうど普及するプロセスでしたね、シドニーは、自国の文化を世界に発信できたとか、オリンピックスタジアムで障害者を広く受け入れたという、どちらかというとなり無形のレガシーが多い一方で、アンケート調査をみると、アテネは、空港ができた、地下鉄が伸びた。北京も、新しい地下鉄ができた、道路が安全になったとか、どちらかというとなりハードです。これはやはり経済的に発展途上の国と、既に成熟した都市との違いが見て取れます。そう考えると、1964年は、私たちはこちらのグループで、ハードのレガシーです。首都高だとかそういったもののイメージが強いですが、たぶん2020年は、ハードで何ができたというよりも、ほかのアトランタやシドニーやロンドンと同じように、無形なものとして何を残せたのかということのをきっちり考えなければいけません。ハードのほうが分かりやすいです、見て分かるわけですから。目に見えない無形な何を残していくのか。しかし、それを作らないと、この日本はたぶん良くなっていかないし、世界に貢献できない。そんなことを考えています。

2020年では、オリンピック17日間、パラリンピック13日間、計30日間で延べ1千万人の人が来る。1日最大92万人くらいの人に来て、8,467億円を使う。こんなオリンピックを、今、予定しています。

立候補ファイルでも、ハード、社会環境、スポーツ、オリンピック振興、選手村、国際スポーツ振興プログラム、競技会場でスポーツを楽しむ機会、運動による若者の健康的な

スタイルにするとか、いろいろなことがレガシーとして計画はされています。

そういった意味で、東京オリンピックの開催、パラリンピックの開催意義としては、21世紀の国際社会において東京・日本がリーダーシップを発揮するという。世界に誇るテクノロジーであったり、世界に誇るおもてなしや日本文化であったり、あるいは世界に誇る健康。ねんりんピックだとか運動部活動だとか、こういったものをきっちり我々が棚卸しして再評価して、それをどうやって磨いて提供していくのかが、このオリンピックが終わったあとにつながるのではないのでしょうか。

実際に、日本は健康に老いている人が多い、こういう特徴があります。男性は、このあいだ81歳を超えました。女性は、もう世界1位。医療費も、年寄りが多いのに、OECDの国でも下から数えたほうが早い。食文化やラジオ体操など、健康で長生きする秘訣を持っています。世界に誇るべき教育システムもあります。スポーツを楽しめる素養、運動の持ち越し効果、子どもの頃にスポーツをしない人は、大人になってもなかなかできません。

さらに、スポーツだけではなくて、文化、芸術もあります。文化、芸術では、日本らしさの発信。もともと1912年のストックホルム大会までは、芸術競技ということで、スポーツや運動競技とは別に、彫刻だとか絵画だとかを競っていた時代があります。今、文化プログラムに発展して、ロンドンフェスティバルでは世界のアーティストが参加してイギリス全土でイベントをやっています。世界に、日本全土の地域文化や高齢者活動など、元気で豊かな国をPRするというのをやってはどうかと思います。

1996年にハイデルベルクでIOCとWHOの国際会議がありました。世界各国は、みんな高齢化で日本の後を追っています。どうしたら日本のように高齢者が運動するのか。日本には、ねんりんピックというイベントがあり

ます。これは厚生労働省がやっている、60歳以上の人が参加するスポーツ競技大会ですが、だいたい都道府県開催を持ち回りでやっているのが、1回開催すると50万人くらい集まります。お年寄りですから、孫や家族におみやげもたくさん買出し、観光もして帰るし、経済効果としても少なくない。そうやって楽しみながら日本の高齢者が身体を動かしているようなものは世界から見ると実は憧れなのです。日本では「高齢化、高齢化」と全部ネガティブに捉えられていますが、日本の高齢者にはすばらしいところがたくさんあります。そんなこともきちんと世界に伝えて、ほかの国もこれから同じように高齢化していくので、しっかり逆にもう一度見直して、伝えていくことができるかもしれません。

日本の教育システムですが、日本人が持つ礼儀作法とか、おもてなしも含まれますが、こういったもの。サッカーの長友選手が、いつもあそこでお辞儀をして、イタリア人が同じように真似をしています。たぶんそんな形だけではなくて、日本人が本当におもてなし、来た人に喜んでもらう、オリンピックにきた選手にも、役員にも、マスメディアの人にも、観客にも、それ以外の観光客にも喜んでもらえる。そういう日本人が持っている精神性、こういったものが何か無形のレガシーとして伝えていけるようなことを考える必要があるのではないのでしょうか。

今までの私の話は、日本で、東京で何を残すか、あるいは日本の地方も含めたそういう話であったのですが、今、思いついているアイデアがありまして、メダル・ゼロ国への支援です。IOCには204の国と地域が加入しているが、過去30回の夏季大会に、74の国と地域は、まだメダルを1個も取ったことがありません。ロンドンオリンピック、僕らがものすごくうれしかったのは、日本が過去最多のメダルを取ったことです。あれは、実は、ほかにも裏があり、メダリストが毎日いたの

です、競技開催日。だから、毎日、ニュースを見ると必ずメダリストがいて、すごくみんな元気をもらったのです。

さらに、26の国と地域はメダル1個で、204のうち100の国と地域はほとんどメダルと無縁です。

例えば、ゼロ国でいいますと、日本が最近親しくしているカンボジアとか、ミャンマーとか、ブータンとかブルネイ、こんな国もメダルを一度も取ったことがありません。例えば、一県一国運動で競技力向上を支援して、コーチを派遣したり競技者の受け入れなどをして、こういった国々が2020年大会で、オリンピックやパラリンピックでメダルを、もし1個でも取ったとしたら、たぶんこの国の人たちは2020年大会のことを一生忘れない。その国にヒーロー、ヒロインが生まれることによって、その国の人たちがどれくらい元気になるのか。つまり、日本以外にもどういった無形のレガシーを残すかが、これは東京だったり日本人だから、たぶんできる発想だと思います。

これまでのオリンピックは、あの大英帝国だったイギリス・ロンドンでさえ、自分の国が世界3位になる、自分の国がどうする、自分の都市をどうするしか考えられなかったのが、たぶん日本人は、おもてなしという考えからすると、ほかの国から見て、ほかの国が2020年大会を通じてどうやって幸せになってくれるかを、考えられる国民なのではないでしょうか。つまり、オリンピックパラダイムを大きく変える。商業主義、勝利至上主義、そして肥大化という道を進んできたのですが、ここで日本人が初めてパラダイムシフトをすることができるかもしれないオリンピック、それは無形のレガシーをほかの国にも作り、残していく。

例えば、これはかなり風呂敷を広げましたが、こんなことができたらいいなと感じています。荒唐無稽なようですが、幾つかに話をしますと、自治体でも関心のあるところがあったり、あるいは様々な民間財団とか、そういったところは関心を示しています。健康

スポーツ産業としても、もしかすると、日本の中のマーケットということだけではなくて、まだまだ遅れている、健康づくりやフィットネスやスポーツとはまだまだ程遠いような国々を何か支援していくことで、無形のレガ

シー、あるいは有形のものも残していくことができるかもしれないと思います。

それでは、時間になりましたので、これで私の話を終わります。

(終了)